

マルコによる福音書 12:35—37

「神の右の座にお座りになる方」

2026年4月19日(主の日)

藤沢北教会牧師 長倉基

今日はこの礼拝で洗礼式が行われます。うれしいことです。イエス・キリストの救いを受け入れ、教会の信仰を告白し、救われて罪赦されて、キリストと一つとなりその命に生きる。洗礼を受けること、授けられることの意味は、一言では、いえ、いくら言葉を尽くしても言いつくすことのできなません。人の言葉を超えた恵みです。今日の受洗にいたるまで、準備会で教会の信仰の基本的なことを一通り学びました。教会の信仰を自分の信仰として告白するためには欠かせないことです。けれども、それでもなお学びの範囲を超えないのであって、洗礼を受けたあとも、ここにいる信仰者がそうであるように、学びを続け、より豊かに恵みを受ける歩みをいっしょにしていきたいと思います。その意味では洗礼はゴールではなくスタートにすぎません。

さて、洗礼を受けた者は、生まれ変わって新しい歩みをします。その一つの表現方法は、これからはキリストを王として生きる、ということです。本日の箇所では主イエスがダビデの言葉を引用していますけれど、これは詩編110:1の言葉です。詩編2と並んで「王の即位の詩編」と呼ばれます。神が王を即位させられる。すべての地上の王にまさる王であり、この王は、神の右の座にお座りになる方、つまり神の全権をゆだねられた方です。ユダヤの人たちは救い主、メシアを待ち望んでいました。国が崩壊し、今ローマという大国の支配の下にいます。そこから解放してくれるメシア、新しい力強い王が神から遣わされると信じていたのです。王の即位の詩編も、そのような王の登場の預言として読み継がれてきました。そして、その王はダビデの子、ダビデの子孫に生まれると信じられていました。主イエスがここで言う「ダビデ自身がメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか」という言葉は、一見すると矛盾の指摘にすぎないように見えるかもしれませんが、確かにそうなのです。ここで「主は、私の主に言われた」の最初の「主」というのは主なる神、父なる神のことです。その「私の主」というのはこれから王に即位するメシアのことです。詩編は当時ダビデがうたったと考えられていましたから、ダビデが「主は、私の主に言われた」と言っているわけです。ダビデ自身がメシアを「私の主」と呼んでいる。それではメシアがダビデの子であるわけがないではないか、というのです。子は親のものですから、自分の子供、子孫が自分の主であるなどということは考えられないことでした。けれども、主イエスはここで単に理屈を述べられたわけではありません。この「どうしてメシアがダビデの子なのか」という問いかけは、「どのようにしてメシアはダビデの子なのか」とも理解できる言葉なのです。つまり、「いかなる意味でメシアはダビデの子なのか」と問うておられるのです。

ダビデ王の理解には2つの伝統があるようです。一つは、王国を確立させ、神殿の計画を立てた立派な王様。ユダヤの人たちがメシアはダビデの家から出ると言う時、このよう

な力強い王を期待していたに違いありません。そして、このダビデ王に匹敵する王がローマをうち倒し、自分たちのイスラエルの国を独立させて解放してくださる、自由を与えてくれる、と。わたしたちも、救い主、と聞けば、このような力強い王のような人を想像するでしょう。弱い自分を助けてくれるのは力強い王だ、と。ダビデの理解にはもう一つの線があります。それは罪深い王としてのダビデです。これもちゃんと旧約聖書にしろされているので、力強いダビデ王を期待していた人たちは、このことから見ないようにして目を背けていたのでしょうか。サムエル記下の第11章、第12章です。あるときダビデが、自分の王宮の屋上を散歩していた時、バト・シェバという美しい女性が水浴びをしていたのを見つけます。どうしてもその女性を手に入れたいと思うようになったダビデは、王の特権によってその女性の夫を激戦地の最前線に送って戦死させてしまいます。未亡人となった女性はそんなことは知らず、ダビデの求婚を受けて結婚します。そのあと、何食わぬ顔で生活していたダビデの罪を、いっしょにいた預言者ナタンに罪を指摘され、バト・シェバとの間に生まれた長男を失いながらも、王であり続けることを許されます。王であっても罪を犯す、それもむさぼり、殺人、姦淫など何重にも罪を犯したのがダビデなのです。

そして、主イエスは地上においては、このダビデの家にお生まれになったのです。マタイによる福音書は「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・系図」という言葉によって始まっています。そして、アブラハムから、ダビデを経て、父親であるヨセフまでたどりつき、そこにマリアを母として「メシアと呼ばれるイエスがお生まれになった」と記します。またルカによる福音書、これはクリスマスの礼拝やページェントでも読まれますが、住民登録のために身重になったヨセフとマリアのことをこう記します。「ヨセフもダビデの家系であり、またその血筋であったので、ガリラヤの町ナザレからユダヤのベツレヘムというダビデの町に上っていった」。間違いなく主イエスはダビデの家系にお生まれになりました。けれども、それは力強い王ダビデの子孫としてではなく、罪を犯した王ダビデの子孫としてお生まれになったのです。それは、この主イエスが罪人として裁かれなければならなかったからです。そこで、何度でも思い起こしたいのは、このマルコによる福音書の物語の筋でいくと、あとほんの数日で主イエスは十字架におかかりになる、ということです。この1週間毎日エルサレム神殿に来て、議論をし、教えておられました。指導者たちの殺意が高まって、命の危険があることを、主イエスは十分に感じ取っておられたと思います。そんな時に、理屈を述べておられたのではないと思うのです。そうではなくて、まことのメシアとはどういう方であるか、そのことをお示しになったのです。神は、ご自分の御子を右の座につかせられます。メシアになさいます。それは、敵が足台となるように、敵がひれ伏すためです。敵とは、世の支配者ローマ帝国のことではありません。そうではなくて、人間の最大の敵、罪です。罪を屈服させるためにメシアは来られる、イエス・キリストというメシアがこられたのです。人間がこの王の下でまことに幸いに生きるために、この王は人間の罪を克服してくださいました。しかし、それは人が思うような力強いやり方ではなくて、弱く罪深い人間と同じになられ、ご自身が弱くなり、罪を犯してはいない

のに罪を負ってくださる、そのようにして、でした。「いかにしてメシアがダビデの子なのか」。これがその答えです。罪を負うという仕方では主イエスはメシアになってくださったのです。主イエスは、人間の罪をすべて背負って十字架にかかってくださいました。罪の結果である死をひきうけてくださったのです。もう罪の代償は支払われましたから、わたしたちはその罪を負う必要はありません。自由なのです。

洗礼を受ける者は、この主イエスの罪の赦しに与って、罪から自由にさせていただいて、この王の下で新しい人生を歩み始めます。キリストが王である、というのは別の言い方をすれば、キリストの支配の下に生きるということです。支配なんて不自由だと思ってもいいかもしれません。けれどもわたしたちは、何にも縛られないで生きてきたのに、洗礼を受けたら支配されて不自由になる、のではないのです。これまでは罪に縛られていた。罪の支配の下にいたのです。まったくの自由な空間があって、そこでわたしたちは好き勝手に生きる、それは自由なんかではありません。そういうところにこそ罪が顔をもたげて、あのダビデのような罪を犯してしまう。それがわたしたち人間です。ダビデはその力と知恵をもって、国を治め、戦いに勝利してきました。しかし、どうじにその知恵と力を用いて罪を犯したのです。それが人間の姿です。わたしたちはどんなに自由だと言い張っても罪の支配の下にあるのです。けれども、そこから、主イエスがご自分の命をかけて救い出してください、ご自身の支配の下にわたしたちを置いてくださる。ここにこそ本当の自由があります。

その自由とは、「心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、神を愛すること」、そして「隣人を自分のように愛すること」この愛に生きることです。神を愛することの第一は礼拝をすることであり、神に仕えることです。自由というのは自分の気分で何かをする、ということではありません。そうではなくて神を愛するという軸、見るべき点だけ一点が与えられることで、本当になすべきことを知る、進むべき道を知ることだと思えます。そうすることで自分に何が起こっても、いやなことがあっても、ほかにもっとよさそうなことがあっても、いつも神とともにあゆむ、いえ神が歩んでくださるし、ほかの道を歩んでしまうなどという心配をする必要がなくなります。これが自由だと思えます。人を愛することもおなじで、何があっても、自分の信仰による自由によって、気分がよくても悪くても、相手が気に入らなくても、相手が好いてくれなくても、仕え、助けることができる。これが本当の自由だと思えます。なお、わたしたちは迷い、疑い、信仰に自信がなくなり、気分で行動し、道からそれるかもしれません。だからこそ、主イエスが必要です。罪を足台にして、天で父なる神の右に座しておられる救い主イエス・キリストなしには一歩も歩むことができないのです。洗礼はゴールではなくスタートだと言いました。洗礼を受けたら、主イエスの救いに与り、キリストを王として、その支配の下に歩み始めるということです。それは、神を愛する自由の中に生きる、隣人を愛することをした自由で生きる、これは今日洗礼を受ける人はまさにこの歩みをこれから始めます。すでに信仰生活をしている人たちは、この恵みに生かされていることをあらためて確かにし

ます。信仰にいたっていない、縁遠いと思っている人もぜひ、この恵みに与っていただきたい、その日がいつか来る、神がその時をあたえてくださる、そう信じます。

このように多くの人、さまざまな人が洗礼式のあるこの礼拝に参加していること、神がこのように招いてくださったことを心から嬉しく思います。藤沢北教会の歩みにこのような喜びの礼拝の日を与えてくださったことを主に感謝いたします。